

まちづくりの人材育成プログラムと連動した 地域協働の場の形成

片岡 由香¹ ・ 羽鳥 剛史²

¹ 正会員 愛媛大学 社会共創学部環境デザイン学科 講師 (〒790-8577 愛媛県松山市文京町 3 番)

E-mail: kataoka.yuka.kq@ehime-u.ac.jp

² 正会員 愛媛大学 社会共創学部環境デザイン学科 准教授 (〒790-8577 愛媛県松山市文京町 3 番)

E-mail: hatori@cee.ehime-u.ac.jp

地域課題の解決や公共政策の現場においては、まちづくり活動を主体的に進めていく人材が必要となる。そのような現場では、能動的かつ継続的な展開を目指していくことのできるような人材が求められることが多く、そのような人材の育成に取り組むことも求められている。筆者らの実践研究においては、学び手がまちづくりの担い手に“なってみる”場の設計が必要であると考えており、そうした場では地域の実情や学び手の批評的省察を促す諸々の要因をまちづくり学習の「リソース」として捉え、学び手がそれらにアクセスできるようにサポートすることの必要性を指摘している。本発表では、このようなまちづくり人材育成プログラムを通して担当者が学び手と地域のステークホルダーとの協働を生み出す場を設える上での実践的方法について論じる。

Key Words: local collaboration, practical learning, systemic design

1. はじめに

土木計画学や都市計画学のように、都市の諸問題を研究対象とする研究者は、まちづくりの実際の現場の問題に関与する機会が少なくない。さらには、「まちづくり」そのものを対象として研究する研究者は、研究者自身が、コミュニティの人々と直接関わりをもち、さまざまな取り組みを企画しながら、諸問題に取り組む研究スタイルも増えてきている。例えば、行政と大学がリソースを出しあい、組織化されるアーバンデザインセンターの数も全国的に増加している(2021年4月時点で全国23ヵ所)。

研究者が現場に身を置く場合、現場のステークホルダーからは、研究者は「何らかの専門的知識を有する専門家であり、専門分野での知識を市民に教授してくれる存在」としてみなされており、かつ、研究者自身もそうした期待を前提としたふるまいをすることが少なくない。例えば、しばしば「人材育成」という目的のために、専門家である研究者が市民に講義を実施したり、市民が主体となって行う取り組みを実施する際のメンターとなるような企画があり¹⁾²⁾³⁾⁴⁾、まちづくり学習に関する様々な研究の蓄積もある⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾。つまり、専門家が「外部」から、現場の「内部」のステークホルダーに知識を与え

るというアプローチ(教授学的なアプローチ: pedagogical approach)がしばしば採られる。

しかし、正統的周辺参加理論(Legitimate Peripheral Participation)の提唱者である Jean Lave and Etienne Wenger は、社会的実践では、「外部」と「内部」という明瞭な二分法を確立し、「知識の内化(つまり獲得)に還元する」という学習だけではなく、例えば、そのコミュニティで共有されている認知構造についての「知」が実践活動の中で統合的に確立していく必要性を指摘している¹⁰⁾。こうした知識は、関係論的相互依存性のあるものであり、したがって、社会実践において、「研究者が何を現場の人々に教えればよいのか?」という問題提起ではなく、「研究者と現場のステークホルダーが、どのような関係性を、どのように築いていけば良いのか?」を問う必要がある。つまり、研究者自身をまちづくりという現場から切り離された外部の主体として客体化するのではなく、まちづくりのステークホルダーの一主体として、自らの立ち位置(立場性)を相対視する視点が必要となる。つまり、「行政-大学-市民」というステレオタイプの文脈を当然視するのではなく、こうした見立て自身を可変なものとする脱文脈的視座、そして、関係性のダイナミクスを認識するための枠組みを再構築する必要がある。

表-2 これまでのプログラムの受講生が取り組んだプロジェクト

期生	プロジェクト名	プロジェクト概要
1期生	道後源泉ウォーク	道後への愛着を持ってもらうことを目的に、道後温泉地区に点在する源泉を探し、歩いてもらい道後の魅力を発見・発掘するイベントの企画。
	椿の香りでおもてなしプロジェクト	松山市花に制定されている「やぶ椿」や、世界的な観光地である道後地区に点在する椿の花に着目し、椿の香りを活用した地域ブランディングを目指して、椿の香りの空間演出や体験イベントの企画。
	まちなかの手づくりプールで遊ぼう	子どもの外遊び環境の変化に着目し、中心市街地での子どもの遊び場創出を目指し、中心市街地内に位置するひろばにおいて、土嚢やブルーシートを用いた手作りのプールで遊ぶイベントの企画。
	次世代へ繋ぐ、ボクらの軌跡 ～アーバンデザインスクール活動記録～	市民への周知とともに、アーバンデザインスクール受講生の活動記録の蓄積のために、ウェブデザイナーからの支援を受けながら、ホームページを作成し、各プロジェクトを web 上にアーカイブ化。
	道後のにぎわいをいつまでも ～歩いて見つけるまちの魅力～	道後温泉地区における温泉以外の魅力創出を目指し、地区内に点在する「湯玉」に着目し、まちあるきイベントを開催し、参加者の感想等を踏まえてマップを制作・配布。
	愛媛の「食」 これ、大街道総なめしてるってよ ～ぼっち・つれてってマップ～	地域に根づく松山市ならではの飲食店や菓子屋を取材し、その情報をラジオで発信し、その情報をもとにオリジナルの瓦版を作成・掲示。 松山市中心市街地の大街道商店街とその周辺を対象に、1 人でも入りやすい店や友人・恋人に連れて行ってもらいたい店を取り上げたマップ製作・配布。
2期生	ジモティ life 松山	県外から松山に来ている移住者のコミュニティを作り、松山の魅力を知ってもらい、松山での暮らしを豊かにすることを目的に、移住者が交流できるワークショップを企画。
	椿の香りでおもてなしプロジェクト	1期生からの継続プロジェクト
	名もなき公園@柳井町	あまり手入れが行き届いていない公園を拠点に、地域住民の交流をうみだすことを目的に、公園整備や地域イベントへの参加を通して、地域とのつながりを形成。
	Family's Story プロジェクト	親子の思い出になる機会の提供と記録を目的に、親子が夢中になる瞬間を記録に残し、地域での親子の思い出をつくってもらうために親子で映画監督になるイベントを企画。
	まつトラムラリー	公共交通に乗るきっかけをつくり、楽しみながら松山のまちについて知ってもらう機会をつくることを目的に、路面電車を使ってクイズラリー形式でまちを巡り、松山の歴史や魅力を再発見し、公共交通に慣れ親しんでもらうイベントを企画。
	三津けた！私のまちの写真館	歴史的街並みと魅力的な風景を残す三津地域を対象に、三津の過去、現在を未来につなげることを目的に、以前の三津の写真を地域の方々からお借りし、現在の三津地域を地域の方々と一緒に撮影した写真を用いた写真展を企画。
路地裏映画館 in 柳井町商店街	まちなかの空き地や駐車場を市民にとって豊かな空間にすることを目的に、商店街をひとつの映画館として見立て、駐車場を上映するイベントを企画。	
3期生	伊予絋班	松山の資源である「伊予絋」に着目し、伊予絋に興味を持ってもらうきっかけとして、若い女性観光客を対象に、伊予絋を使ったアクセサリを作成するワークショップを実施。
	かやまちクラブ	萱町商店街のお店の魅力のひとつが、対面販売を通じた店主との交流にあると考え、萱町商店街をあまり利用しない地域住民を対象に、店舗の認知度向上と利用促進を目的としたイベントを企画。
	休日プランナーズ	松山市の中心市街の裏通りに着目し、若者向けに裏通りでしか過ごせない休日をテーマに、裏通りの楽しみ方や使い方を提案するフリーペーパーを作成。
	公園まちづくり@松山	城山公園を対象地とし、公園を住民にとって暮らしの軸に、まちにとって賑わいの核とすることを目的に、季節ごとの公園の新しい使い方を提示するイベントを企画。
	Nexus	消費者と生産者をつなぎ、人々が滞留する空間を花園町通りに創出し、賑わいづくりと生産農家と地域住民をつなげることを目的としたイベントを企画。
	まつトラムラリー	2期生からの継続プロジェクト
4期生	イトコ道後	道後地区内の上人坂とその坂上部に位置する宝蔵寺に着目し、宝蔵寺内に仮設的にベンチを設置し、夕焼け鑑賞と道後地区の歴史を発信することを目的としてツアーを実施。
	井野森隼太郎	松山市中心部に位置する城山公園から見える星空に着目した。癒しをテーマに、飲食店の出店を依頼し、星空鑑賞を行うイベントを実施。
	エキカツ！	JR 松山駅での待ち時間の長さに着目し、待ち時間に利用できる JR 松山駅周辺の飲食店を記載したマップの製作・配布を実施。
	街を照らし隊	松山市中心商店街の南側に位置する柳井町商店街に着目し、夜間帯において、商店街や店舗内を灯籠等によりライトアップを実施。
	松山アートプロジェクト	松山の代表的な文化である俳句に着目した。季節感の感じられる 4 句の俳句を選び、4 種のスープを用意、どのスープがどの俳句を表しているか考えながら楽しむイベント実施。
	Washi Sky Project～空いっぱいいの和紙～	愛媛県の伝統的な特産品である大洲和紙に着目し、松山市中心部に位置する花園町通りにおいて、大洲和紙を地面から高さ 3m ほどのところに屋根状に展示するイベントを実施。
5期生	広がれ！伊予絋の魅力	普段使いができるものや若者向けの商品を制作することによって伊予絋普及を目指し、絋柄の砥部焼そばちょこやランチョンマット等の伊予絋製品を企画販売した。
	足湯会談	まちの玄関口 JR 松山駅前にて、温泉足湯を利用した交流イベントを実施。
	GET！でまちキャン	再開発を予定している商店街の空店舗で街中キャンプをコンセプトに空間演出の企画に取り組んだ。
	ファッション小雑誌「MI-TTSU」	三津浜地区の隠れた魅力を発信するためファッションを切り口に小冊子を企画発行した。
	Outdoor Movie Night	城山公園の魅力的な活用を目指し、野外映画上映会を開催。防災意識の向上を狙い、電気自動車の発電機能を活用した。

つつ、まちづくりに携わる上での基本的な素養や問題意識を学ぶことを目指しており、ファシリテーターやコーディネーター等の特定のスキルや専門能力の習得を目指したものではない。言い換えれば、参加者はまちづくりの担い手の立場に“なってみる”という経験を得ることが求められ、研究者を含むまちづくり担い手育成の担当者には、学び手が初学者なりにまちづくりの担い手に“なってみる”場を設計することが求められる。

3. システミックアプローチと担い手育成の場づくり

UDS の取り組みでは、参加者が初学者なりに担い手の立場に立ち、自分達のまちづくり活動の意味や意義を批判的に捉える中で、言わばそれと同時に相即的に、彼らの第 2 の自我として理想的なまちづくりの担い手像が形成された可能性について示唆を得ている¹⁵⁾。また、研究者自身も人材育成の場づくりに取り組む中で、受講生と地域ステークホルダーの間に入り自らもステークホルダーとしての立場性の変化を認識することがある。このような過程においてシステミックアプローチを検討することで、ダイナミクスを表現するための「語り口」の作成を試みる事が可能であると考えられる。

本研究が対象にするのは 1 つの事例に過ぎないが、研究者と現場ステークホルダーの関係性に注目し、ダイナミックな進化を伴う現場の生態的知識を蓄積すれば、研究者が現場に関わる際の「構え」を導くことが可能になると考える。

参考文献

- 1) 野澤千絵：市民のためのまちづくり学習の効果と課題に関する研究：全国人口 1 万人以上の自治体主催のまちづくりリーダー・コーディネーター養成講座を対象に、都市計画論文集, No.40-3, pp.559-564, 2005.
- 2) アーバンデザインセンター研究会編著：アーバンデザインセンター開かれたまちづくりの場，理工図書，2012.
- 3) 松浦佑介, 梶本希, 近藤将輝, 渡辺尚見, 中尾謙太, 脇田祥尚, 小笠原郷太：まちづくり学習モデルの実践および検証-平成 21-23 年度大阪市まちづくり担い手育成講

- 座を事例として一，日本建築学会近畿支部研究報告集，計画系，No. 52, pp. 493-496, 2012.
- 4) 科研費（萌芽的研究）研究成果報告書 09875123：子どもを対象としたまちづくり教育・学習のあり方，2000.3
 - 5) 西山康夫，渡辺貴之，村瀬章：まちづくり教育の概念と展望，都市計画，No. 116, pp. 9-15, 1981.
 - 6) 脇田祥尚，黒谷靖雄，田中隆一：参加のまちづくりの学習プログラムに関する研究-松江まちづくり塾を事例として，都市計画論文集，No. 37, pp. 871-876, 2002.
 - 7) 田坂亮，和多治，高見沢実：小学校の総合的な学習の時間に組み込まれた「まちづくり教育」に関する研究-横浜市の小学校を対象とした調査を通して，都市計画論文集，No. 38, pp. 47-47, 2003.
 - 8) 谷口綾子，小林三千宏，田中義晴，平石浩之：モビリティ・マネジメント教育の長期的効果継続性に関する実証分析-モビリティ・マネジメント実施 3 年後の意識調査より一，土木学会論文集 H（教育），Vol.2, pp.45-52, 2010.
 - 9) 北原啓司：持続可能な地域計画のためのまちづくり教育の可能性-「土手住専科」における実践とその評価，都市計画論文集，No. 34, pp. 547-552, 1999.
 - 10) レイブ・E. ヴェンガー：状況に埋め込まれた学習正統的周辺参加，産業図書，1993.
 - 11) 小野悠，尾崎信，片岡由香，羽鳥剛史，羽藤英二：地方中核市におけるアーバンデザインセンターの実践 松山アーバンデザインセンターを事例に，日本建築学会計画系論文集, No.755, pp.167-177, 2019.
 - 12) 志田尚人，羽鳥剛史，尾崎信，小野悠，片岡由香，松村暢彦：公民学連携まちづくり組織のプログラム評価に関する事例研究：松山アーバンデザインセンターのロジックモデル作成事例，計画行政, No.43(2), pp.39-48, 2020.
 - 13) 片岡由香，羽鳥剛史，羽藤英二：まちづくり実践学習のプログラム化と地域連携への展開可能性に関する研究，土木学会論文集 D3, No.72, vol.5, pp.523-532, 2016.
 - 14) 片岡由香，羽鳥剛史，河内俊樹，直井玲子：まちづくり担い手育成プログラム：「松山アーバンデザインスクール」の意義と課題（特集 地域文化と地域経営），地域デザイン学会誌 No.8, pp.189-208, 2016.
 - 15) 小川直史，羽鳥剛史，片岡由香，尾崎信：まちづくり人材育成プログラムにおける学習経験と担い手像の形成に関する研究-松山アーバンデザインスクールの試み-，土木学会論文集 D3, No.76, vol.5, pp.569-588, 2021.

(Received October 1, 2021)

FORMATION OF OPPORTUNITIES FOR LOCAL COLLABORATION IN CONJUNCTION WITH HUMAN RESOURCE DEVELOPMENT PROGRAMS FOR CITY PLANNING

Yuka KATAOKA, Tsuyoshi HATORI

In this paper, we discuss the practical methods of creating a place where people in charge can create collaboration between learners and local stakeholders through human resource development programs for city planning.